

コロナ禍における乳児を抱えた母親の 動的家族描画法の描画特徴

坂中 尚哉 (医学部臨床心理学科)・小出 優奈 (医学系研究科臨床心理学専攻)

(2022年12月15日受理)

Abstract:

本研究は、乳児を抱える母親に対して、動的家族描画法 (kinetic Family Drawings :以下 K-F-D) を施行し、コロナ禍における乳児を育児する母親の描く描画特徴を検討した。調査対象者は、特定非営利活動団体 A が運営する子育て支援施設に通所する 0~2 歳の子どもを育児中の母親 31 名 (平均年齢 32.0 歳) である。形式分析の結果、「人物像の大きさ」、「人物像の高さ」において、父親の存在が際立つ描画表現が見られた ($\chi^2(5) = 66.355, p < .01$)。次に、「母親と対象児との距離」において、「母親」の一番近くに「対象児」(0~2 歳児) を描きやすく ($\chi^2(3) = 46.032, p < .01$)、「対象児」に対する関心の高さや親密性が投影されていると推測された。内容分析では、「食事をする」などの室内での主題と比べて、「公園や庭先でのプール」などの屋外での主題が多い傾向 ($\chi^2(1) = 23.516, p < .01$) にあった。K-F-D には描き手の生活環境に加え、時代性や風土性を如実に映し出す側面があることを考察した。

キーワード: 動的家族描画法、乳児を抱える母親

1 はじめに

2020 年から世界を席卷しているコロナ感染症は、現在、第 8 波に迫る状況にあり、その勢いは未だ衰えていない。

本邦では、2020 年 3 月 2 日から春季休業の開始日まで、全国の小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校に対しては臨時休業が要請された。一方、保育所、幼稚園といった乳幼児が利用する施設、放課後児童クラブは原則開所が要請され、これらの施設では、学校以上に密閉・密集・密接の「三密」の状況も見られ、感染の不安を抱えながらの保育であった。その後、2020 年 4 月 7 日に 8 都道府県に対する緊急事態宣言が発令され、4 月 16 日からはその宣言は全国に拡大されたことに伴い、乳幼児の各施設等の利用の自粛が求められた。宣言解除後しばらくは保育所等の利用自粛が続いたことから、育児相談や親子の交流が行われる子育て支援施設や児童館、図書館が閉館となり、加えて、公園の遊具が使用禁止となるなど、保護者の子育て環境に大きな影響を与えることとな

った。池本 (2020) は、「コロナ禍によって、在宅勤務が拡大したことなどから、乳幼児を持つ保護者にとって、時間的なゆとりの発生や、子どもと一緒に過ごす時間の増加などのプラス面があった一方、こうした国や自治体の対応の結果、様々なマイナスの影響が報告されている」と指摘する。特定非営利活動法人全国認定こども園協会の乳幼児のいる家庭を対象に実施したアンケート (2020) によると、登園自粛が求められた緊急事態宣言下に、4 人に 3 人が「困りごとがあった」と回答し、その内容としては「子どもとの過ごし方に悩む」が 7 割、「親の心身の疲弊」が 5 割、「減収や失職となり、生活や育児の費用が心配」が 2 割で、そのほか「在宅で仕事に集中できない」、「家事・育児などをめぐり夫婦間のトラブルが増えた」も 1 割強であった。

このように、コロナ禍における乳幼児を抱えた母親の子育ての苦労が偲ばれる。こうした母親たちが抱える育児ストレスや育児不安に対して心理的支援を行う際には、

乳幼児を抱えた母親の心理的特徴を把握することが必要である。特に、人生早期の乳児を育児することの心理的負担は想像に難くない。従来、母親の育児ストレス研究では、質問紙調査が主流であり、育児環境の不備や育児に対する社会からの圧迫感といった心理社会的な要因を認知する母親の育児ストレスは高く、抑うつ程度も高まるとされている（草野・小野2010）。一方、このような乳幼児を抱える母親における心理的特徴を把握する手がかりとして、高橋・大野（2003）は動的家族描画法（kinetic Family Drawings :以下 K-F-D）が子育て中の母親のアセスメントに有効な手段になり得ることを示唆している。

K-F-D とは、Bums&Kaufman（1972）が確立した投影描画法であり、「あなたの家族全員が何かをしているところ」という教示の通り、描かれる人物像が行為・動作を伴うことから、母親の捉えた各家族成員が示す対人態度と、全体として母親から映る家族力動を読み取ることを可能にする。高橋・大野（2003）は、2、3歳の子どもを子育て中の母親に対して K-F-D を施行し、母子関係の視点から、描画特徴や心的特性について検討している。高橋・大野らによると、母親は父親を最初に描く傾向にあり、父親を母親に近づけて描く割合は低く、対象児を近くに描く傾向にあることを示唆する。また高橋らは、母子の関係性について愛着行動尺度を援用し、K-F-D の特徴を検討しており、愛着行動尺度の高群と低群間で描画特徴に有意な差が認められたのは、「人物像の大きさ」であり、低群の母親は対象児を最も小さく描く特徴が見られたことを指摘している。このように、K-F-D を用いることで、子どもに対する母親の認知や家族の相互作用性、凝集性といった側面を評価することが可能であり、K-F-D がより臨床的に有用なアセスメント資料になると考えられる。

そのため、本研究は、乳児を抱える母親に対して K-F-D を施行し、コロナ禍における乳児を育児する母親の描く描画特徴の検討及び家族関係のアセスメントとして母親の描く K-F-D の有効性について検討することを目的とする。

2 方法

2-1 調査対象および時期

調査対象は、特定非営利活動団体 A が運営する子育て支援施設に通所する 0 から 2 歳の子どもを育児中の母親 31 名（平均年齢 32.0 歳：範囲 26-42 歳）である。調査は、団体 A の施設内の面接室にて 2021 年 7 月に行った。

2-2 倫理的配慮

本研究は、香川大学医学部倫理委員会により、審査を受け、承認を得た上で実施（受付番号・2021-040）した。

研究協力者となった子育て支援施設 A および、調査対象者に対しては、研究趣旨、方法、個人情報保護、利益、不利益、データの公表について書面と口頭で説明し、署名をもって同意を得た。また、本研究で研究対象者から取得した個人情報は「匿名化され、どの研究対象者の情報であるか直ちに判別できないように加工または管理されたもの」として扱った。

2-3 調査内容

K-F-D の施行は、通常 1 対 1 の面接場面で施行するのが望ましいが、子どもの年齢が 0 から 2 歳であり、母子を分離した面接場面を設定することが困難であったため、面接室で調査者対親子の 3 名で調査を行った。描画は、時間制限を設けず、白色のケント紙（A4 版）と鉛筆（HB）、消しゴムを用意し、以下の教示を与えた後に描画を施行した。

「これから、この画用紙に、あなたを含めて、あなたの家族が何かをしているところの絵を描いてください。漫画や棒のような人ではなく、完全な人を描いてください。家族の人たちが何かしているところを描いてください」。

調査者は、描画中の観察と描画後の質問により、「描画のテーマ」、「描画内の人物がどの家族構成員にあたるのか」、「描画順位」の 3 点を確認した。また、描画特徴との関連を見るために、母親に対してフェイスシート（母親の年齢・子どもの年齢・子どもの性別・同居家族の家族構成・居住形態・コロナ禍の育児において大変だと感じること）への記入を求めた。

3 結果

本研究に参加した母親の描画 31 例について、観点ごとの描画特徴の出現率について分析を行った。分析は、日比（1986）、高橋・大野（2003）の（1）「人物像の大きさ」、（2）「人物像の位置」、（3）「人物像の高さ」、（4）「描画順位」、（5）「母親と対象児との距離」に加えて、本研究独自の（6）

「描画の面積」を6つの形式分析を行った。さらに、内容分析として、高橋・大野(2003)、奥川・西村(2021)を参照し、(7)「行為」、(8)「家族の相互作用性」の2つの分析を行った。なお、分類は筆者ら2名で協議し、最終的な分類を行った。

なお、以下の形式分析の(1)「人物像の大きさ」、(2)「人物像の位置」、(6)「描画の面積」の空間使用領域においては、画用紙を横方向に20等分、縦方向に14等分し、描画がマス目に被っている場合に1と数え、数字の大きさを人物像の大きさと捉えることによって行った。

3-1 形式分析

(1) 人物像の大きさ

Table1は、「人物像の大きさ」の出現率について示したものである。対象児(child ; c)、父親(father ; f)、母親(self ; s)を分析対象とし、大きく描かれた順番に従って、①「fc」(父親・対象児・母親)、②「fs」(父親・母親・対象児)、③「cf」(対象児・父親・母親)、④「cs」(対象児・母親・父親)、⑤「sf」(母親・父親・対象児)、⑥「sc」(母親・対象児・父親)の6つに分類した。

その結果、「人物像の大きさ」については、「fs」(父親・母親・対象児)の順に描いたものが多く、 χ^2 検定の結果、有意な差が認められた($\chi^2(5) = 66.355, p < .01$)。Figure1は、「fs」の順に描いた一例を示す。

	fc	fs	cf	cs	sf	sc	その他
出現率(%)	6.5	71.0**	3.2	0.0	9.7	3.2	6.5
	n.s.	p=0.00	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

*p<.05, **p<.01

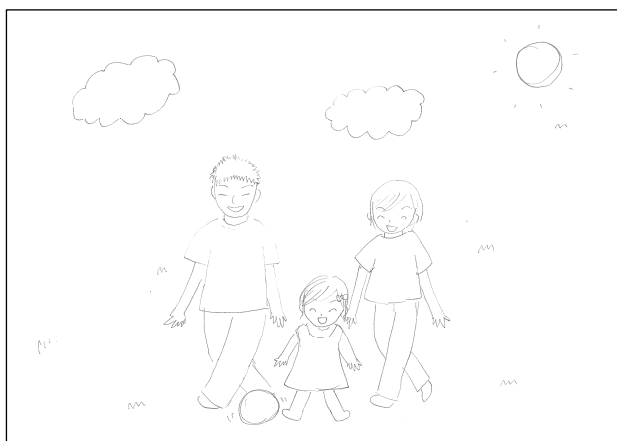


Figure1. 「fs」の順に描いた K-F-D

(2) 人物像の位置

Table2は、「人物像の位置」の出現率について示したもので

ある。判定は、グリュンヴァルトの「空間図式」に基づいて、右上、左上、左下、右下、真ん中の中で最も自己像が描かれている面積が大きい部分を選択している。また、判定対象である母親が描画に描かれていない場合は、その他に分類した。

その結果、自己像である母親を真ん中に描いたものが最も多く3割以上を占めており、 χ^2 検定の結果、有意な差が認められた($\chi^2(5) = 18.355, p < .01$)。Figure2は、「自己像」を真ん中に描いた一例を示す。

	右上	左上	左下	右下	真ん中	その他
出現率(%)	3.2	6.5	25.8	25.8	35.5**	3.2
	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	p=.003	n.s.

*p<.05, **p<.01

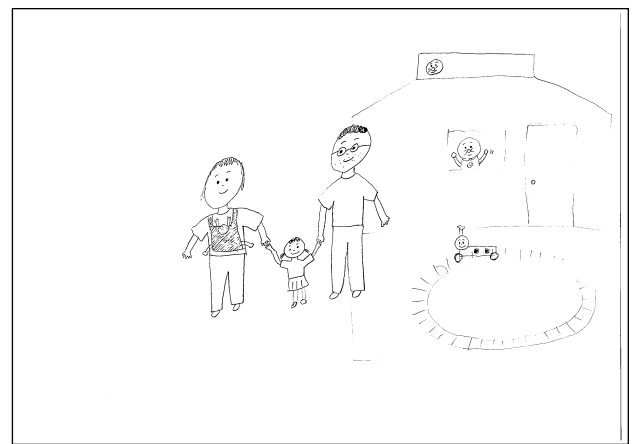


Figure2. 自己像を真ん中に描いた K-F-D

(3) 人物像の高さ

Table3は、「人物像の高さ」の出現率について示したものである。分類は、画用紙の一番上に最も近く描かれた人物をミリ単位で計測することにより行った。

その結果、人物像の高さについては、父親を最も高い位置に描くものが多く6割以上を占めており、 χ^2 検定の結果、有意な差が認められた($\chi^2(3) = 26.677, p < .01$)。

Figure3は、「父親を一番上」に描いた一例を示す。

	自己像	対象児	きょうだい	父親
出現率(%)	29.0	6.5	3.2	61.3**
	n.s.	n.s.	n.s.	p=.000

*p < .05, **p < .01

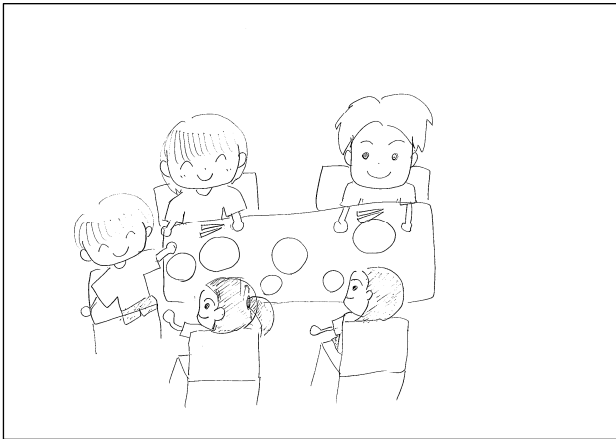


Figure3. 父親を一番上に描いた K-F-D

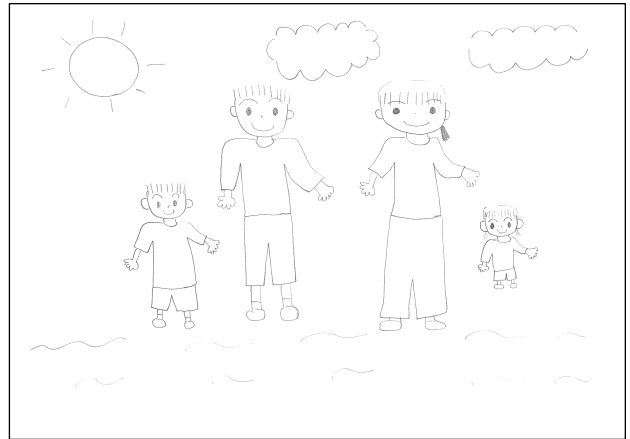


Figure4. 対象児を母親に最も近づけて描いた K-F-D

(4) 描画順位

Table4は、「描画順位」について示したものである。 χ^2 検定を行った結果、有意な差が得られなかった。また、対象児・父親・自己像を分析対象とし、それぞれが描かれた順番により分析を行ったところ、「fc」(父親・対象児・自己像)の順に描くものが最も多く、3割以上を占めていたが、 χ^2 検定の結果、有意な差は得られなかった(Table5)。

Table4. 描画順位(4分類)

	対象児	きょうだい	父親	自己像
出現率 (%)	25.8	16.1	38.7	19.4
	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

Table5. 描画順位(7分類)

	cf	cs	fc	fs	sc	sf	その他
出現率 (%)	16.1	9.7	32.3	16.1	12.9	6.5	6.5
	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

(5) 母親と対象児との距離

「母親と対象児との距離」の出現率を Table6.に示す。 χ^2 検定を行った結果、有意な差が得られた($\chi^2(3) = 46.032, p < .01$)。残差分析の結果、母親は兄弟や父親に比べて、対象児との距離を近くに描写することが示された。Figure4 は、「対象児を母親に最も近づけて」描いた一例を示す。

Table6. 母親と対象児との距離

	対象児	きょうだい	父親	その他
出現率 (%)	77.4**	6.5	12.9	3.2
	p=.000	n.s.	n.s.	n.s.

*p<.05, **p<.01

(6) 描画の面積

「描画の面積」の出現率を Table7.示す。「描画の面積」の算出には、画用紙を横方向に 20 等分、縦方向に 14 等分し、マス目が被っている部分を 1 として数え、全 280 マスの内 140 マス以上に被っている描画を「大」(50%以上)、70 マス以上 140 マス未満に被っている描画を「中」(25%から 50%)、70 マス未満に被っている描画を「小」(25%以下)とした。また、人物以外の物、例えば太陽・雲・花・机・建物なども描画の一部として算出した。

「描画の面積」について、 χ^2 検定を行った結果、有意な差が得られた($\chi^2(2) = 11.290, p < .01$)。残差分析の結果、画用紙「大」(50%以上)を使用している描画が最も多いことが示された。Figure5 は、描画の面積「大」、Figure6 は、描画の面積「小」の一例を示す。

Table7. 描画の面積

	大(50%以上)	中(25%~50%)	小(25%以下)
出現率 (%)	54.8	38.7	6.5**
	n.s.	n.s.	p=.000

*p<.05, **p<.01

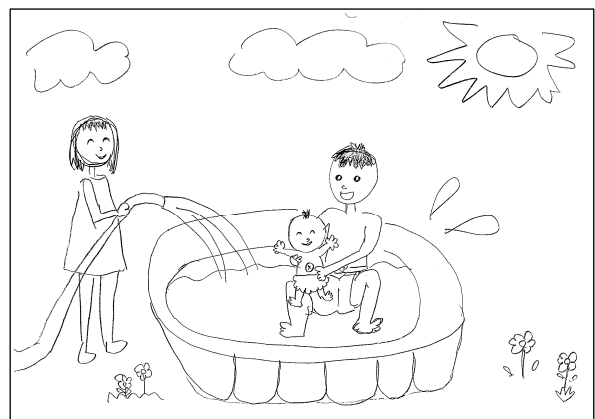


Figure5. 描画の面積「大」を描いた K-F-D

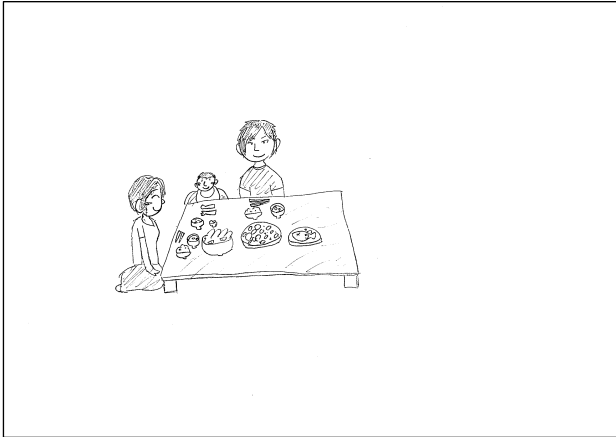


Figure6. 描画の面積「小」を描いた K-F-D

3-2 内容分析

K-F-D は、「家族が何かをしているところ」という運動が付加されることによって、家庭内の家族の相互性が表現されることが期待されている。内容分析では、描画の主題に基づき、(1) どのような行為を行っているのか、(2) 家族成員が共に一つの活動を行っているのか、の 2 つの観点から検討する。

(1) 行為

Table8は K-F-D に描かれた行為（動的、静的）ごとの出現率（%）を示している。行為の分類は、奥川・西村（2021）を参照枠とし、「動的行為」とは、食事、運動、ドライブなど活動的な主題であり、一方「静的行為」とは、テレビ鑑賞、睡眠、読書などの非活動的な主題の場合とした。

χ^2 検定の結果、有意な差が認められた($\chi^2(1) = 23.516, p < .01$)。残差分析を行ったところ、描画の主題は、「静的行為」に比べて、「動的行為」を描写することが示された。Figure7は、「動的行為(家の外)」、Figure8は「静的行為(家の中)」を描いた一例を示す。

次に、Table9は、行為を「動的行為(家の中)」「動的行為(家の外)」「静的行為(家の中)」「静的行為(家の外)」の 4 つの主題の出現率(%)を示している。 χ^2 検定を行ったところ、有意な差が得られた($\chi^2(2) = 12.645, p < .01$)。残差分析の結果、「動的行為(家の外)」を主題とした家族画を描写しやすいことが示された。

Table8. 行為

	動的行為	静的行為
出現率(%)	93.5**	6.5
	$p = .000$	$n.s.$

* $p < .05$, ** $p < .01$

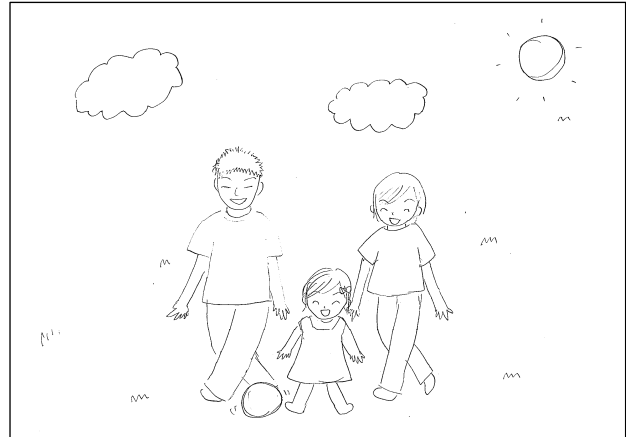


Figure7. 「動的行為(家の外)」を描いた K-F-D

Table9. 行為(主題)

	動的行為(家の中)	動的行為(家の外)	静的行為(家の中)	静的行為(家の外)
出現率(%)	29.0	61.3**	9.7	0.0
	$n.s.$	$p = .002$	$n.s.$	$n.s.$

* $p < .05$, ** $p < .01$

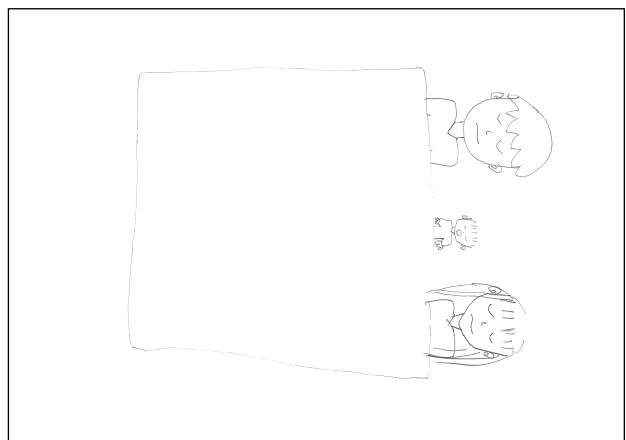


Figure8. 「静的行為(家の中)」を描いた K-F-D

(2) 家族の相互性

Table10は、「家族の相互作用性」の出現率について示したものである。家族が何か一つの活動を行っている様子が描かれている場合を「相互作用あり」、家族が一つの活動を行っていないものを「相互作用なし」に分類した。 χ^2 検定の結果、有意な差が認められた($\chi^2(1) = 23.516, p < .01$)。残差分析を行ったところ、家族間の相互作用性があることが明らかになった。Figure9は、「相互作用あり」を描いた一例を示す。

Table10. 家族の相互作用性

	相互作用あり	相互作用なし
出現率(%)	67.7*	32.3
	$p=.048$	$n.s.$

* $p < .05$, ** $p < .01$



Figure9. 相互作用ありを描いた K-F-D

4 考察

4-1 形式分析から

(1) 父性優位な描画表現と風土性

形式分析の「人物像の大きさ」、「人物像の高さ」において、父親を一番大きく描きやすいこと、用紙上方に父親を描くなど、父親の存在が際立つ描画表現が見られた。この傾向は、高橋・大野（2003）の研究と類似する。日比（1986）は、人物像の大きさについて、「関心の高い人物などが大きく強調して描かれる」とし、「上方に位置して描かれる人物像は、家庭内での王様やリーダーの役割を被験者によって与えられている」と述べる。

高橋・大野（2003）は、2～3歳の乳幼児を抱えた母親を対象に K-F-D を施行しており、その研究では、対象児を一番大きく描く傾向にあることを報告している。本研究では、高橋・大野らの描画傾向とは異なり、父親優位な描画表現であった。K-F-D には、「日常的社会的枠組みの強さは家族画へ投影される」（日比,1986）ことを考慮するならば、家庭内における父親の役割（家長制度）が大きく反映したものと思われる。同時に、家長制度などの被験者が住まう昔ながらの父性優位な風土性が描画に投影されているとも言える。

このように描画には、描き手のパーソナルな投影に加

え、その人がどのような風土において育ったのか、その風土性と切り離せない。ここでいう「風土」と呼ぶものは、土地の気候、気象、地質、地形、景観などの総称であり、その個人が住まう自然環境における空間的、時間的構造が含まれる。和辻（1979）は「人間は単に一般的に過去を背負うのではなくして特殊な風土的過去を背負うのである」とし、個人の現在は、静的な過去ではなく動的な構造を持つことが考えられることから、描画の理解においても、風土性を踏まえた重層的な視点を持って眺める必要があると思われる。

(2) 自己像と対象児との関係性

人物像間の距離は、「端的に被験者から見た A と B との間の親密性の度合や、あるいは感情的離反の強さを物語る」（日比,1986）とし、また「母子関係に困難を有する被験者は、母親と子どもを用紙の左右の両端に描いたりして、その状態を表現してくるものである」と述べる。本研究では、自己像である母親に対象児（0～2歳）を最も近づけて描く割合が有意に高かった。対象児を母親に最も近づけて描くという描画傾向は、対象児に対する関心の高さや親密性を表していると示唆される。また、きょうだいではなく対象児が最も近くに描かれる傾向は、とりわけ、健康面・安全面においても手が離せない時期にあり、心理的、身体的距離の近さが描画として投影されたと考えられる。一方、調査環境が対象児の通う子育て支援施設であり、対象児と同室にて描画を施行した状況要因を考慮しておく必要がある。

4-2 内容分析から

(1) 描画の主題

日比（1986）は、テレビやそれを観ることは、K-F-D の描画に頻発するテーマであり、わが国の多くの家庭の今日的風潮としての普遍的側面を意味しているものの描画への投影であるとの見解を示している。しかし、本研究では、テレビを視聴し団欒する描画は一枚も見られなかった。これも時代の変化なのであろう。

さて、「家族で食事をする」などの室内を想起した主題は 3 割程度であり、「公園や庭先でのプール」などの屋外での主題が 6 割程度と多かった。また、「布団で寝

ているところ」という一例を除き、その多くが動的な主題であり、育児中の母親の多忙さ、活動的な様子をうかがわせた。ところで、本調査は、コロナ感染症拡大時期と相まって、外出が思うようにできない時期でもあった。それにも関わらず、「動的な家の外」を主題とした描画が多くなった背景には、外出制限に伴う心理的ストレスや抑圧される外出したい思いの表現とも考えられるが、想像の域を出ない。

5 さいごに

本研究は、コロナ禍において 0～2 歳児を抱える子育て中の母親の K-F-D の描画特徴として、以下の 3 点に要約する。

(1) 描画における「人物像の大きさ」や「人物像の高さ」などの形式分析より、父親優位な描写となり、家庭内における父親の役割の大きさが推測された。

(2) 描画における「母親と対象児との距離」といった人物間の距離において、母親に一番近くに対象児 (0～2 歳児) を描きやすく、対象児に対する関心の高さや親密性が投影されていると推測された。

(3) 本調査はコロナ感染症のパンデミックとなってから 2 年目にあたる 2021 年であった。この頃は、未だコロナ感染症の拡大傾向にはあったが、国民一人ひとりが感染予防に十分に気をかけながら、行動制限が多少なりとも緩和した時期であった。2020 年の自粛生活の反動であろうか、内容分析において、「食事をする」などの室内での主題と比べて、「公園や庭先でのプール」などの屋外での主題が多い傾向にあった。また、描画中に「以前のようにこうして自由に公園で遊べたらいいんですけど」と K-F-D の主題が未来に対する願望として表現された母親もいた。コロナ禍故の語りであり、描画表現であると思われる。

最後に、本研究の課題は、被験者が 31 名と少ないことである。0～2 歳児の子育て中の母親が対象となると、子どもと分離して調査することが難しく、必然的に調査協力が得られにくい状況があるのも事実である。加えて、「with コロナ」の世の中であることも一因であったが、子育て中の母親の K-F-D の描画特性を一般化するためにも、継続的な K-F-D 研究が必要である。本邦において、

子育て中の母親を対象にした K-F-D 研究は、高橋・大野 (2003) に限られている現状を鑑みると、まずはコロナ禍ながらも K-F-D 研究に着手できたことに感謝したい。

引用文献

Burns, R., Kaufman, S. (1972). *Actions, style and symbols in kinetic family drawing(K-F-D). An Interpretative manual.* Brunner.加藤孝正・伊倉日出一・久保義和 (訳) (1982)子どもの家族画診断. 黎明書房.

日比裕泰 (1986) . 動的家族描画法 (K-F-D) 一家族画による人格理解. ナカニシヤ出版.

池本美香 (2020) . コロナ禍で明らかになった子ども・子育て支援の課題—ニュージーランドとの比較を踏まえて. 日本総合研究所, 16, 1-14.

草野恵美子・小野美穂 (2010) . 社会的な要因に関する育児ストレスが母親の精神的健康に及ぼす影響. 小児保健研究, 69, 53-62.

奥川奈々・西村喜文 (2021) . 青年期における主観的に認知される家族機能と理想の家族イメージとの関係性—動的家族画法 (K-F-D) を用いて. 西九州大学子ども学部紀要, 12, 47-55.

高橋正泰・大野博之 (2003) . 動的家族画テスト (KFD) に見られる母親の描画特徴と心理特性—母子関係アセスメントとしての有効性の検討. 九州大学心理学研究, 42, 279-285.

特定非営利活動法人全国認定こども園協会 (2020) . 「新型コロナウイルス感染症対策に係るアンケート調査報告書」, (2022 年 12 月 1 日取得: https://drive.google.com/file/d/1oMebfo_ysub7JaBQcrfhPc8jNFBJtMH/view).

和辻哲郎 (1979) . 風土—人間学的考察. 岩波文庫.